

起業家と研究者の関わり合い

—起業家研究の方法としての二人称的アプローチと共働的な道具—

伊藤 智明 ・ 福本 俊樹

京都大学特定助教 同志社女子大学助教

I はじめに——起業家の試行錯誤を追跡するために

創業期の起業家は、試行錯誤を通して自身の行為や認識を変化させつつ、新たな事業を立ち上げていく。こうした起業家の試行錯誤を詳細に捉えることは、起業のプロセスを理解し理論化する上で、多くの収穫をもたらしてくれるだろう。

しかし、起業家の試行錯誤を捉えるのは容易ではない。起業家の経験を探るべくインタビューを実施しても、そこでの起業家の語りは、「変革の遂行者としての起業家が、特定の協力者の支援を得て、既存の制度を打ち倒す」という予定調和のストーリーに、研究者あるいは起業家自身によって回収されてしまうからである（Gartner, 2007；高橋・松嶋, 2009）。それゆえ、起業家の試行錯誤のプロセスを詳細に捉えるには、起業家への回顧的調査だけでなく、起業をリアルタイムで追跡する調査が有効であろう（Cope and Watts, 2000）。

だが、こうしたリアルタイムの調査にも困難が伴う。まず、起業家から調査への継続的な協力を得ることが難しい。回顧的調査に比べ、リアルタイムの調査はより多くの時間と労力の投入を起業家に求めることになる。多忙な起業家が、調査への協力を負担に感じることは想像に難くない。

そして、もし起業家から十分な協力が得られたとしても、さらなる困難がある。それは、調査を継続する意欲を、当の研究者自身が失いやすいことである。新規事業の創造（あるいは、その失敗）といった結果が出た後でなされる回顧的調査の場合、起業家は巧みに編集された劇的な物語を語る傾向にある。そうした物語は（たとえ予定調和的な語りであっても）新鮮に聞こえるだろうし、何より、研究者にとっては研究成果に結びつきそうな「データ」となりうるものだろう。他方、現在進行中の起業家活動を追跡するリアルタイムの調査の場合は、劇的な物語よりも、むしろ日々の凡事を含んだ雑多な語りが集められていくことになる。研究者にしてみれば、それら雑多な語りが一体どのような研究成果に結実していくのかはイメージしにくい。こうした中で、初めは新鮮味のある

調査も、回数を重ねるにつれて次第にマンネリ化していこう。

本稿の問題関心は、起業家の試行錯誤をリアルタイムで追跡する調査に伴うこれらの困難（の拭い去り難さ）を踏まえた上で、こうした調査の実行・継続可能性を少しでも高めるための方途を探ることにある。この問題に取り組むにあたり、本稿が焦点を当てるのは、リアルタイムの調査が実施・継続可能であるような関係を、研究者が起業家との間に構築していくための技術である。ここで急ぎ付け加えておかなければ、本稿において考察するこれら技術は、単なる対人関係上のコツ・小技といったものよりも、調査研究のあり方を根本的に方向付ける——その意味において、方法論的な——ものとなるだろう。

以下、第Ⅱ節では、調査者と調査対象者との関係性をめぐる質的方法論のレビューを行う。従来の質的方法論では、観察の客観性と中立性を確保した「ラポール」が理想的とされてきたが（Ⅱ.1）、近年では多くのフィールドワーカーたちが、これまでラポール概念によって覆い隠されてきた調査者と調査対象者の関係性に改めて省察的な眼差しを向けている（Ⅱ.2）。本稿もこうした関心のもと、リアルタイムの追跡調査が可能となるような研究者と起業家の関係のあり方を探索するものであるが、そのために第Ⅲ節では、幼児心理学者ヴァスデヴィ・レディ（V.Reddy）によって提唱された二人称的アプローチ（Ⅲ.1）、および、哲学者イヴァン・イリイチ（I.Illich）の共愉性についての議論を参照する（Ⅲ.2）。続く第Ⅳ節では、筆者自身が行ってきたフィールドワークにおける、起業家と研究者との関わり合いの事例を記述する。それを基に、第Ⅴ節では、起業家と研究者との共愉的な関わり合いの形成・維持のための技術について考察し、さらに、経営学の知識創造システム自体が、そうした関わり合いを実現するための道具となる可能性を示唆する。

Ⅱ 質的方法論における調査者と調査対象者の関係

1 方法論的概念としてのラポール

これまで、調査者と調査対象者との関係のあり方については、ラポールの形成が理想とされてきた（e.g. Flick, 2007）。もちろん、ここで言うラポールが、調査対象者から参与観察やインタビュー調査の協力を得るために友好的関係を形成する、という意味合いであるならば、それはどのような調査においても必要なものである。

しかし、ラポールとは単に「調査対象へのアクセスを確保するための信頼関係・友好関係」の別称であるだけでなく、そこには、ある方法論的意味合いが込められている¹⁾。それは、ラポールの構築の成否こそが、調査を通して得られるデータの「質」を左右するとされていることである。つまり、ラポール構築が不十分な場合、調査者は、調査対象者が調査（者）に対して抱く警戒心や不信感のために、「表面的な回答」（質の悪いデータ）しか得られない。もし、調査対象者から「あるがままの偽りのない回答」（良質なデータ）を得ようとするなら、信頼を深め、友好的関係を築く必要がある、となる。

こうした議論には、質的研究の多くが採用する主観主義（Burrell and Morgan, 1979）が反映され

ているだろう。そこでは、社会現象は、調査者が直接アクセスできるものではなく、その当事者の主観的な（＝内面や頭の中にある）意味世界を経由することでしか捉えることができないとされている（反実証主義）。つまり、主観主義に立てば、調査とは、調査対象となる社会現象について、その当事者の主観に内在する意味世界への接近を目指す営みとなる。換言すれば、社会現象についての当事者の解釈に調査者の解釈を近似させる、こうした「ギャップ埋め」の作業こそが調査である、となる。そして、調査者には、調査対象者の主観（＝内面や頭の中）にどれだけ「正確に」（調査者自身のバイアスを排して）接近することができたか、観察の客観性や中立性、そして、得られたデータの真実性が問われることになる（e. g. Lincoln and Guba, 1985）。

それゆえ、調査者が調査対象者と過度に親密な関係を築くオーバーラポールもまた避けるべきであるとされる。そうした状況下では、調査者は「観察者」としての役割を果たせなくなり、客観性や中立性が損なわれてしまう（Langness and Frank, 1981, 邦訳52頁）。したがって、調査者には、自身の客観性・中立性を失わない程度の「一定の友好関係」を、調査対象者との間に構築していくことが求められるようになる。「ラポール」という言葉は、こうしたフィールド内における調査者の位置取りの均衡点ないし最適点を指している。

2 ラポールを超えて——調査者と調査対象者の関係性への方法論的関心

しかしながら、フィールドワーカーによるフィールドワークの経験の報告を参照してみれば、こうした方法論的指針としてのラポールは、フィールドワークの実態にそぐわないことがわかる。もちろんここで、フィールドワーカーたちが方法論上の約束事に違反しているということが言いたいわけではない。そうではなく、こうした教科書的な方法論からはみ出さずにはいられないものこそがフィールドワークであるということだ。

例えば、女性野宿者（ホームレス）を対象にフィールドワークを行った丸山里美が語るのは、女性野宿者たちの回答に、一貫性を欠き矛盾するところが多々見られたという経験である（丸山, 2006）。丸山によれば、同じ女性野宿者が同じ質問に対してその時々で違う回答を返してきたり、また、新聞記者や他の調査者に対する回答と自分に対する回答が食い違っていたりしたという。こうした事態は、従来であれば、ラポール形成ができておらず、良質なデータが得られていないということになり、何が女性野宿者の「本音」であるのかを問いたすべきだ、となるだろう。しかし丸山はむしろ、そうした一貫性のなさ、「断片的であること」（丸山, 2006, 909頁）に、女性野宿者——そして、回答者（または人間）としての——「あたりまえの姿」（岸ほか, 2016, 83頁）を見出す。丸山が描くのは、その時々で他者に影響されながら、自己のあり方を変化させていく女性野宿者の姿であり、そうして営まれている彼女たちの生のあり方である。

丸山によれば、従来の質的研究においてこうした「あたりまえの姿」が描かれてこなかったのは、調査者が調査対象者を「一貫した自律的な意志」（丸山, 2006, 909頁）を持った存在とみなしてきたからである。私たちは、思考や行為の非一貫性・矛盾を「非合理的」なものと考え、その背後に「一貫した論理」や「本音」が潜んでいることをつい期待してしまう。だが、そうした期待こそが、

平板で月並みな被調査者像を描かせるのである。

このように、フィールドワーカーたちが主張するのは、調査対象者の自己のあり方や、彼／彼女たちが生きる意味世界が、固定的で脱時間化されたものではないことである。それらは、たとえ事後的には一貫性を持って表明されるものであっても、リアルタイムの日常の中では、刻々と変化する流動的なものである。そしてそれらは、事後的には矛盾や食い違いを含む「非合理的」なものに見えたとしても、進行中の実践の中では「合理的」に理解可能なものである²⁾。それゆえ、長きにわたるフィールドワークの伝統を持つシカゴ学派の社会（科）学者たちは、自己や意味世界を所与のものとして、日常における他者との相互行為（interaction）を通じて不断に再構成され続けるものとして、その動態を捉えようとしてきた（Mead, 1934; Blumer, 1969）。

こうした視点に立ち、インタビュー調査それ自体を相互行為と捉えることで、質的方法論を根本的に問い直すのが Holstein and Gubrium (1995) である。彼らによれば、インタビューとは、調査対象者の頭の中にあらかじめ「ある」とされる社会現象についての真なる解釈を、極力正確に取り出すような作業——従来そう信じられてきたような作業——ではない。あらゆるインタビューは調査者と調査対象者による相互行為であり、そこでは調査者と調査対象者の双方が、特定の意味を「アクティブ」に作り出す作業に必然的かつ不可避的に関わっている。インタビューの場において表明される調査対象者の自己や意味世界は、調査対象者の内部に保持され、調査者の質問によって取り出されるようなものではなく、まさにインタビューの場において、調査者の行為に反応して組み立てられ、作り変えられる、調査者と調査対象者との「協同構成物」なのである。

このように、インタビューを相互行為と捉え、意味を調査者と調査対象者の協同構成物であるとすれば、調査対象者の中に「ある」はずの「真なる回答」をどの程度「正しく」取り出すことができたか、といった従来の方法論的基準はそもそも成立しえない。インタビューという相互行為に参加する調査者は、客観的・中立的な観察者ではありえず、いつでもすでに調査対象者の意味構成に関わってしまっているからである。よって、むしろ問われるべきは、調査対象者が表明する意味がどのような状況・方法によって構成されたものであるのか、その構成プロセスに調査者はどのように関与しているのか（そして、そうして協同産出された「調査対象者の語り」が調査対象者の生きる現実にもどのように関わっていくのか）、である（Holstein and Gubrium, 1995, 邦訳 32 頁；200 頁）。

このように考えれば、ラポールとは、調査という相互行為における調査者自身の姿を、その客観性・中立性を偽装することによって隠蔽するものに他ならない（山田, 2011, 69 頁；岸ほか, 2016, 113 頁；164 頁）。フィールドにおいて、調査者は決して現地からデータを拾って帰るだけの透明な存在ではない。調査者は、現地の人々にとっては常に具体的な「何者か」（e.g. 「新参者」「仲間」「スパイ」「支援者」）として現れ、調査という活動を通して調査者は、現地の人々の暮らしに、いくらかの（時には小さく、時には取り返しのつかない）影響を与えてしまう。だからこそ、調査者に対して現地の人々が何を語り／語らないかも、調査者が「何者」として彼／彼女たちの暮らしに関わろうとしているかに大きく依存している（山田, 2000；2011）。つまり調査者は、自らが「何者」としてどのように調査対象者と関わっているか、そしてその結果、調査対象者にいかなる影響を及ぼ

しているかに、もっと自覚的・省察的になるべきなのだ。

研究者と起業家との関係のあり方を問うという本稿の問題関心も、こうした議論に連なるものである。起業家の試行錯誤——事後的に見れば非合理的にも思える矛盾や齟齬を孕んだ自己や意味世界の再構成プロセス——は、通常語られにくい。こうした語られにくい語りを聞き取るためには、研究者と起業家の関わり合い（相互行為）のあり方をより意識的にマネジメントしていく必要がある。起業家の試行錯誤を追跡するには、私たち研究者は、「何者」として起業家と関わり合い、どのような相互行為を行えばいいだろうか。次節では、その一つの探索的なモデルを示すことにしよう。

Ⅲ 二人称的アプローチと共愉性

今一度、本稿冒頭での議論に立ち戻っておくと、リアルタイムの調査には、起業家の協力を得にくい、研究者自身の意欲を持続させにくい、という困難があった。それゆえ、リアルタイムの調査における研究者と起業家との関わり合いは、調査を通じた継続的な互酬関係をもたらすものであり、そして、調査の繰り返しにおいて研究者（および起業家）が抱えがちな倦怠感を和らげる（あるいは、忘却させる）「仕掛け」を備えたものでなければならないだろう。

以上を踏まえて、本節では、起業家とどのような関係をどのようにして構築していけばいいかを考察したい。以下ではまず、関わり合いのあり方のモデル（および、そうした関わり合い自体を観察・記述しながら、調査対象を理解していく方法論）を提示すべく、幼児心理学で提唱された二人称的アプローチを参照する（Ⅲ.1）。次に、そうした関わり合いを創出し、維持するための技術を開発すべく、イヴァン・イリイチの共愉性をめぐる議論を参照する（Ⅲ.2）。

1 二人称的アプローチ

幼児心理学者のヴァスデヴィ・レディは、「母親」として自身の娘と親密に関わり合う中で、従来の心理学が想定しているよりもはるかに早い段階で、乳幼児が母親を心を持った存在として認識していることを発見する。こうした発見は、心理学が伝統的に採用してきた個体主義・客観主義的な方法論とは異なるアプローチ、すなわち、研究者が調査対象である乳幼児と情感込みで応答し合うことで乳幼児の発達を理解しようとする二人称的アプローチ（second-person approach）へと結実することになる（Reddy, 2008, Ch. 3）。

レディは、従来の心理学で用いられてきた調査方法論を、一人称的アプローチ、および、三人称的アプローチと呼ぶ（Reddy, 2008, Ch. 2）。一人称的アプローチは、研究者自身の自己を対象者（乳幼児）へと延長すること、すなわち、自身の経験に基づいた類推によって対象者（乳幼児）の心を理解しようとするものである。ここでは、研究者と対象者の関係は、「他者」不在の「私—私」関係となる。他方、三人称的アプローチは、「実験」に典型的にみられるような従来「科学的」とされてきたアプローチであり、研究者が対象者（乳幼児）と距離を置き、その行動の観察と仮説の検

証を通じて対象者を客観的に理解しようとするものである。そこでは、研究者と対象者（乳幼児）は、互いに「他者」であるが、それは「私-彼/彼女」といった関係であり、両者に応答的な関係は存在しない（ことが理想とされる）。

これに対し、レディの提唱する二人称的アプローチは、対象者（乳幼児）の心を、研究者との「能動的な情動的応答（active emotional responsiveness）で構成された知覚的結びつき」（Reddy, 2008, p. 31, 邦訳 39 頁）の中で理解していく（Reddy, 2008, Ch. 3）。言うならば、研究者が対象者と「私-あなた」という関係を取り結ぶことで、対象者を理解しようとするものである。この「私-あなた」関係、および、それを前提とする二人称的アプローチは、以下の特徴を持つ。①「私」と「あなた」は、決定的な意味において「他者」である——一人称的アプローチのような同一化は志向されない。②「私」と「あなた」は互いに感情的に、つまり、互いに喜んだり悲しんだりしながら応答し合う。そこでは相手の行為に対して何らかの反応を返さざるを得ないし、自身の反応次第で相手の異なる反応が生まれてくる——三人称的アプローチのような距離化は志向されない。③「私-あなた」という情感的な応答関係が成立する際、応答の中で互いの心はそれとわかる仕方で可視化されている——「私-あなた」関係の具体的なあり方を観察・記述することで、対象者の心は理解可能である。

最後の③について、少し補足しておこう。従来の心理学で用いられる一人称的および三人称的アプローチの前提にあるのは、「心は個人的な所有物である」という個体主義的な発想である。いずれのアプローチも、研究者の心と対象者の心との間にはギャップがあるという仮定に立ち、それを埋めることを志向する。しかし、こうした個体主義的な心の捉え方の下で、心と心のギャップを一度前提としてしまえば、論理的な帰結として、他者の心は直接観察できないものとなる。その結果、従来の心理学は、レディが「母親」として発見した乳幼児の心の働き——乳幼児は母親と応答し合う中で母親の心を読んでいる——を見落とし続けてきたのである。

そこでレディは、心と心の間にはギャップを想定するべきではないとし、個体主義的な心の捉え方からの脱却を図る（Reddy, 2008, Ch. 2）。実際、日常において私たちが他者と感情的に応答し合う際には、他者の「心の状態」（e.g. 「心配そう」「用心深く」「自信满满で」）がすでに見えているし、見えているからこそ、私たちは他者と感情的に応答し合うことができる（「心の状態」が皆目判別できない相手とは、応答的な関わり合いは困難である）。つまり、私たちの言う「心」なるものは、相互行為の中でそれとわかる慣習的なやり方で可視的に構成され理解されるものであり、言わば、「行為するやり方そのもの」（Reddy, 2008, p. 14, 邦訳 18 頁）である³⁾。心は行為の背後のどこかに隠れて行為を導くようなものでもなければ、身体内部にある実体や場所でもない。心は個人的な所有物ではなく、他者との相互行為の中にこそあると言ってもいいだろう。

それゆえ、二人称的アプローチでは、対象者の心を理解するにあたり、調査者と対象者との情感的な応答を詳細に観察・記述していくことになる。こうした応答の記述がまさしく「情感的な応答」であるものとして慣習的に理解可能な形で記述されているならば、そこには必然的に対象者の心が観察可能な形で現れているからである。否、それだけではない。そこには、研究者自身の心も

また観察可能な形で現れているだろうし、それに応答する対象者の心も現れているはずである。つまり、対象者の発言や研究者への応答に加え、研究者自身の知覚や直感、対象者への応答をもデータとして記述していくことによって (Reddy, 2008, p. 33, 邦訳 42 頁), 他者との関わり合いの中において構成される心を経験的 (empirical) に理解することができるのである。

さて、以上を踏まえて起業家研究の方法論に話を戻そう。まず、起業家の試行錯誤という語られにくい語りを聞き取るためには、研究者は起業家に対して「私 - あなた」として応答的に関わり合う必要があるだろう。起業家をデータの貯蔵庫とみなし、その内奥にあるとされる「真なるデータ」を極力傷つけずに抜き取りようとするのではなく、起業家と情感込みの応答を重ね、自己や意味世界についての起業家自身による省察を促すように、むしろ何らかの「傷跡」を残そうとすること。そして、そうした応答それ自体の具体的なあり方を観察・記述していくことによって、起業家の自己や意味世界の矛盾・齟齬を孕んだ再構成プロセスは、かなりの程度、浮かび上がってくるだろう。

もちろん、「私 - あなた」という二人称的な関わり合いを、すべての研究者がすべての起業家に対して構築できるわけではない。研究者と起業家の場合には、母親と子どもの場合とは異なり、二人称的な関係を生成・維持することの難しさがあるだろうし、二人称的アプローチもあくまで数ある調査方法のうちの一つに過ぎない。しかしそれでも、情感込みの応答を重ねるといのは、起業家の試行錯誤をリアルタイムで捉えていくために有効な手立てであるだろうし、こうした二人称的な関係を生成・維持するための技術を検討してみることも無駄ではないだろう。次項では、共愉性概念を参照しながら、二人称的アプローチを補完する「仕掛け」を考察してみたい。

2 研究者と起業家の関わり合いを生成・維持する共愉的な道具

共愉性 (conviviality) とは、哲学者イヴァン・イリイチによって提示された概念であり、「人間的な相互依存のうちに実現された個的自由」(Illich, 1973, p. 11), 「人々の間の自律的で創造的な交わりと、人々の環境との同様の交わり」(Illich, 1973, p. 11) と定義される。ただし、この conviviality という語には、ある独特かつ多義的なニュアンスが込められている。Illich (1973) の邦訳者である渡辺京二は、「訳者あとがき」において、conviviality をどう訳すかが最大の問題であったことを告白する。渡辺は、「原語のあのおやかで強靱な肉感性とはほど遠い」(邦訳 247 頁) と断りを入れつつも、他に適訳が思いつかないとの理由から、「自立共生」の訳をあてる。この「自立共生」という訳語からは、conviviality の「自立しながらも、関わりを持つ」「依存関係にありながらも、自由、自律、創造的である」という両義的なニュアンスが伝わってくるだろう。

一方、conviviality に「共愉性」という訳語をあてたのは、古瀬・廣瀬 (1996) である。conviviality について、古瀬・廣瀬 (1996) では、インターネット黎明期におけるハッカーたちが、イリイチの思想に共鳴し、コンピューターを政府や大企業の独占から解放し、広く民衆が使用できる道具 (パーソナル・コンピューター) へと作り変えていったこと、そして、国家や大企業への権力の集中を防ぎ、自分たち自身の力によって「ともに楽しみあう社会」の実現を目指そうとしたことが言及されている。つまり、「共愉性」という訳では、「自分たち自身の力で、ともに楽しみあう関係を

実現する」というニュアンスが強調されていると言えるだろう。認知心理学者の佐伯胖もまた、convivialityの「共愉性：ともに楽しみあう」というニュアンスを重視し、二人称的な関わり合い (Reddy, 2008)こそが、他者を共愉的な存在と見なすことであり、「人はなぜ学ぶか？」という問いの答えは、他者と共愉的な関係を作り出すことにあるとする (佐伯, 2014)。

このように convivialityの語には、様々なニュアンスが込められている。本稿では、これらのニュアンスを踏まえ、人と人 (e.g. 研究者と起業家) がそれぞれ異なる目的や利益を追求しながらも、共にいることが楽しく、創造性を刺激しあうような関係を指すものとして conviviality という語 (および「共愉性」という訳語) を用いる。そして本稿では、研究者が起業家と「私-あなた」という二人称的な関係を築くためには、調査プロセスの様々な局面 (とりわけ、その初期段階) において、共愉性を生み出す「仕掛け」を配置することが重要と考える。

ここで今一度イリイチの議論に立ち戻れば、彼は道具 (tool) を、われわれの社会関係を規定する本質的な要因と見なす (Illich, 1973, p.21, 邦訳59頁)。ここでイリイチの言う「道具」には、ドリルやハンマーといった物質的なモノのみならず、工場のような生産システム、教育や政治の制度など、合理的に設計された社会的工夫すべてが含まれる (pp.20-21, 邦訳58頁)。これらの道具は、人と人、および、人と社会や自然との関係を媒介し、私たちが何者であるか、また、私たちがどのように考え行為するかを規定する。イリイチは、そのユーザーに「おのれの想像力の結果として環境をゆたかなものにする最大の機会を与える道具」 (p.21, 邦訳59頁) を「共愉的な道具」と呼び、他方、そうした可能性を拒み、道具の考案者の目的や期待にユーザーを服従・従属させる道具を「操作的な道具」と呼ぶ。そして、人々の自由や創造性を制限する操作的な道具を、共愉的な道具へと置き換えていくことを展望した。

さて、研究者と起業家の関係について見てみれば、研究者と起業家は元より、「研究成果をあげたい／事業を成功させたい」というようにそれぞれ異なる関心を有している。それゆえに両者の関わり合いは、どちらかの関心が前面化した「研究のためのデータを得る場／事業の成功のためのアドバイスを得る場」のいずれかに陥りがちである。こうした関わり合いは、操作的な道具を媒介に一方が他方を従属させるもの——起業家が持つ「データ」に研究者が従う／研究者が持つ「知識」に起業家が従う——であると言えるだろう。もちろん、それぞれの関心の下で関わり合うのは悪くはないし、自身の関心を捨て去るべきでもないが、問題は、こうした関わり合いはいずれどちらから (あるいは双方から) 飽きられるということである。

したがって、起業家の試行錯誤を追跡するような調査を行いたければ、研究者は自身と起業家との関わり合いを媒介する道具に省察的な眼差しを向けなければならない。そして、関わり合いが自身と起業家の双方にとって創造的な刺激が得られるものとなるよう、操作的な道具ではなく共愉的な道具を意識的に配置していかなければならない。研究者には、言わば演出家的な目線で、「共愉的な関わり合い」という舞台の装置や小道具を整えていくことが求められるだろう。

IV 事例——起業家と研究者の関わり合いの記述

ここまで、起業家と研究者の関わり合いのモデルとしての二人称的關係（「私－あなた」関係）、そうした関わり合いを生成・維持するための技術としての共働的道具について述べてきた。いくぶん抽象的な方法論になったため、本節では、筆者（伊藤智明）自身がこれまで取り組んできたフィールドワークにおける起業家と研究者の関わり合いについて、具体的な事例を記述しよう。以下ではまず、筆者が起業家と関係を築くにあたり、どのような共働的道具を使用したかについて記述し（IV.1）、次に、起業家といかに情動的に応答しあい、起業家の試行錯誤を捉えてきたかを記述する（IV.2）。なお、筆者が意図的に使用した共働的道具については、「〈創業者像〉」といったように、初出時に〈 〉で括弧で表記する。

1 起業家と研究者にとっての共働的な道具

本項では、調査開始から研究テーマが決まるまでの約10カ月の出来事を記述していく。

起業家の乃村一政さんと私は、私が住んでいた〈木下記念事業団神戸学生会館〉で会うことにした。乃村さんが会館に到着後、私の部屋を見てもらってから二階にあるマルチグループの〈創業者像〉を二人で見た⁴⁾。私たちは、2週間前に出会ったばかりで、最初の〈対話〉は2011年4月21日に実施された。乃村さんはSOUSEI株式会社（以下、SOUSEI）と株式会社シェアワークスの代表取締役（当時）であった。

この日を迎えるまでの私は、大学院生としてインタビューや観察で調査を行ってきた。インタビュー調査の方は公刊に至った（伊藤、2010）が、インタビューの一人は公刊前に私の記述や解釈についての異論を述べた。観察調査の方は、上場企業の常務取締役をインフォーマントにする形で進めたが、開始から1年が経過したところで継続を断念した。

今から考えれば、私は実務と研究とが融合した経営学的なフィールドワークを実現しなかったのだろう。私が漠然とイメージしていたのは、実務家と研究者がそれぞれに自らのプロジェクトを推進させながら、互いのプロジェクトを重ね合わせるフィールドワークである。過去の調査協力者たちは戸惑ったであろう。「調査されること」に慣れていない上に、私が志向していたことは「調査」の枠組みに収まりそうになかった。

準備万端であることを悟られないように、私は乃村さんを三階の〈会議室〉に案内した。乃村さんの会館到着前に、〈ホワイトボード〉中央に「事業」と「プロジェクト」、中央上部に「企業」、中央下部に「大学」、左側に「経営者」と「乃村一政さん」、右側に「経営学者」と私の名前を記入しておいた。座席はホワイトボードを挟んで、左側に乃村さん、右側に私が座るように対称的に配置してある。会議室から15歩程度で行き来できる距離に〈図書室〉があり、当時、私は多くの時間をその図書室で過ごしていた。

私はこの対話でICレコーダーを使用しなかった⁵⁾。この対話を行なう理由は、データ収集では

なく、経営者の悩みを聞くためである。対話を継続するために、乃村さんにそう認識してもらう必要があった。対話が終わると、早速、対話の〈逐語記録〉を作成し、乃村さんへメールで送付した。乃村さんからの返信が夜に届いた。

今日二人で話したことが嘘かのように新鮮に一言一言が入ってきました。この記録がもつ価値を改めてこのメールを見てわかった。もしかすると、僕はとんでもないことに出会えたのかもしれないです。今このメールを何度も読み返し、興奮を抑え切れません。私はどうしても成功したいと今改めて強く思っています。あの建物にこれ程の感謝を持ち、これ程価値を見出し、そして経営者に対してこれ程の喜びを与えるという使命を全うされている。たった一人でもそのような人が生まれるなら、私は、最終章において次代に「環境」をプレゼントする義務があると再認識しました。あなただけではなく、あの建物にプレゼントをもらった一人に私は今日なれたのだから⁶⁾。

対話型の調査を自然な形で開始することはできた。調査の開始時に私が考えていたのは、どうすればいいデータを入手できるかではなく、どうすれば私たちの対話を繰り返すことができるかである。私が欲したのは、対話を繰り返すための口実と仕掛けである。

4回目の対話を実施した後、私は乃村さんへメールし、梅棹忠夫の著書『知的生産の技術』（梅棹、1969）に紹介されている〈カード法〉で記録を蓄積すると伝えた⁷⁾。以降、〈カード〉は、二人の対話を記録する媒体になった。対話を続けることは、対話の記録が増えることを意味するようになった。

早速、この書籍で説明されているカード法に基づく記録の仕方を採用し、この書籍に関する記録をつくりました。「ことばの交換」に関する記録も、すでにこのカード法に類似した記録法になっていました。★でトピックを区切ったり、そこに見出しをつけたりという。それでも、そのことをより意識的にやれるようになるだけでも、「ことばの交換」をよりいい武器にしていけますね⁸⁾。

私たちは、二人の対話を京都の〈天龍寺〉で金井壽宏先生にお披露目することにした⁹⁾。天龍寺の〈曹源池庭園〉が、二人の対話を象徴する舞台装置になると考えたからである。天龍寺の開山の夢窓疎石が作庭した理由は、坐禅の初心者雲水でも精神的な静けさに到達しやすい空間をつくるためである¹⁰⁾。

天龍寺内にある精進料理店の篩月で昼食をとりながら、乃村さんは金井先生と対話した。乃村さんが私たちの対話のことを説明すると、金井先生はすぐに省察について話し始めた。金井先生は、行為につながる省察とつながらない省察、対話の記録があることの価値、支援とは何か、『小倉昌男 経営学』（小倉、1999）と経営者の経験、対話で省察し続けた起業家が10年後に省察するインパ

クト、といったトピックなどを対話の中で私たちに伝えた。

対話の繰り返しと記録の蓄積、および、金井先生との対話を経て、私たちの〈研究テーマ〉は、「起業家の省察」になった。

2 起業家と研究者の情動的で応答的な関わり合い

私たちは対話で様々な道具を共愉的に使うことで、乃村さんは起業家としての自己を、私は研究者としての自己を見せ合った¹¹⁾。2011年4月8日に出会い、長文のメールを何度か交換してから最初の対話の日を迎えたが、その日までにも互いがイメージする起業家像と研究者像を見せ合っていた。

乃村さん： 私は、伊藤さんから頂いたこの多くの言葉を読み、とても感動的な気持ちになっています。私も気づいていない私の思想の根源や私の思想が創り出すであろう未来が、論理的に理解でき、雪が太陽に照らされ輝きながら溶けていくような、不思議な感覚にとてつもなく感謝しています¹²⁾。

筆者： 私は、乃村さんが目的を達成していくプロセスに寄り添いながら、事業創造が実現に向かうように促すことになるかと存じます。しかしながら、やはり私自身の第一義的な仕事は、それを書き残すことになるわけです¹³⁾。

最初の対話を実施してから3日が経過した。私は「理論化の文章」と題する〈レポート〉を乃村さんにメールで送付した。このレポートにおいて、私は二人の対話を「ことばの交換」と名づけて、自らの使命を乃村さんに宣言した¹⁴⁾。

筆者： 最後に、新事業（不動産ポータルサイト事業）を展開していく中で、「私の使命は何か」について考えてみました。乃村さんは、「離職率0%」の企業を目指すとおっしゃっておいりました。この目標は、新事業を展開する上でも、変わらずに採用される目標になるでしょうか。もし、そうであるならば、その企業体は超健康優良児を目指すことになります。私の使命は、ここに関わるものになるのではないのでしょうか。すなわち、私の使命＝企業体を超健康優良児にされるべく尽力される乃村さんの心身に関する健康状態を把握することではないのでしょうか。もちろん、私は医者でもありませんし、臨床心理士でもありません。したがって、私は乃村さんとの「ことばの交換」を通じて、その経営者としての精神と身体の状態を推察することしかできません。いいえ、それすらもできないでしょう。私ができることは、「ことばの交換」を続けさせていただけるような存在で在り続けるべく精進するのみです¹⁵⁾。

私たちは「ことばの交換」で省察的対話を繰り返した。「ことばの交換」を始めてから約2年半が経過した2013年10月10日23時過ぎ、乃村さんからメールが届いた¹⁶⁾。

乃村さん： 実は明日、伊藤さんにメールしようとしていました。明日の朝、全社員を集め、弁護士立会いの元、(株式会社) SMART INTEGRATION (以下、SI) の倒産廃業を発表します¹⁷⁾。経緯は後回しにして、色んな意味で私は明日から新しい道を歩まなければなりません。しかし、それでも、ことばの交換を続けてくださいますか?¹⁸⁾

何事もなかったかのように、私たちはそれから対話を継続したが、ある日、乃村さんは、翌々日に行なう予定だった第26回「ことばの交換」をズル休みすると私に伝えた。

乃村さん： 10月11日以来、いかなる否定にも罵倒にも反抗できずにきました。事実、SIを潰したのですから。しかし、この一か月、とうとう自分で自分の精神状態を維持できなくなっています。そこで、少し人との接点を減らすことにしました。情けない話ですが、私にはたくさん家族がいます。生きることをドロップアウトすることもできません。しばし穏やかに生きていきたいと思います。私は連続起業家にはなれません。歩みを踏み外したきっかけの場所であるシェアワークスで、見つめ直すためにことばの交換をしたいと思ったのですが、心が持たなくなりそうなのでズル休みさせてください。必ず、一、二か月で復帰します¹⁹⁾。

「連続起業家にはなれない」——そう語ったおよそ1カ月後、乃村さんから SOUSEI の新たな経営理念が届いた。数日後、私は乃村さんにメールを送信し、乃村さんから返信があった。私のメールでは、やまだ(2007)の「おわりに——生きることと研究すること」(281-302頁)を引用した。私は乃村さんを喪主に、SIを故人に見立てて、弔辞を述べた。

筆者： 「死者の供養を必要としているのは、亡くなった者ではなく、喪失を抱えて生きなければならない生者であろう。」(中略) 起業家として生きることと起業家研究者として生きるとは、ほとんど一緒のことを意味するのではないかと思うことがあります。それは、表と裏の関係で、一人で演じ分けてもいいし、誰かと演じ分けてもいいのでしょう。そうすることで、より意味のある人生を生きられるのであれば、それは望ましいことかもしれません。起業家にとっての喪失を起業家研究者が触れることはできないと諦めることをやめます。できないことを認めることは、やらないことの原因にはならないと思うから。これからは、思う存分、肩身の狭さを感じながら、じっくりと研究に取り組んでいこうと思います。これまでと変わらずに²⁰⁾。

乃村さん： まだまだ茨の道は続くでしょうが、眼鏡を外した分、歩みは楽でしょう。百億の会社より百年続く会社。そんなのを目指したいと思っています²¹⁾。

V 考 察

本節ではまず、前節の事例記述を振り返りつつ、共働的な道具の使用法について考察し（V.1）、さらにそれを敷衍する形で、経営学自体が研究者と実務家を媒介する共働的な道具になり得ることを検討する（V.2）。

1 共働的な道具の使用法

事例記述を要約しておく。まず、起業家と研究者は、いくつかの道具を共働的に使用し、省察的対話を繰り返した。中でも逐語記録やカードは、起業家と研究者が互いの省察の履歴を参照できる状態をもたらし、関わり合いの形成・維持に役立った。研究者は、起業家と関わり合う中で多様な道具を用いたが、共働的な関わり合いを形成・維持する道具の使い方に特徴があった。既存の解決策をフィールドワークで適用する（ready-made）だけではなく、代替的な解決策を用意周到に、かつ即興的につくった（made-to-order）。

次に、研究者は、起業家の試行錯誤を追跡するために、起業家が見せる自己像に回答する形で状況ごとに異なる自己像を見せていた。対話の開始時点では、野心的な起業家と並走する新進気鋭の経営学の研究者像を提示した。事業の失敗から起業家が回復しようとするタイミングでは、起業家と一体不可分な研究者像を提示した。重要なことは、各時点で異なる自己像を互いに提示していたことではなく、起業家の自己像と研究者の自己像が情動的に回答し合っていたことである。

起業家と研究者との共働的な関わり合いを形成・維持するにあたって、筆者は「ことばの交換」と名づけた対話記録法を起業家と共同で開発してきた。この対話記録法は、起業家の無数の情動的な応答を記録することに使用してきたわけだが、その記録はカード化され、起業家にフィードバックされる。加えて、対話の回数を重ねるごとに、記録が蓄積されていく仕組みであった。言い換えれば、対話を繰り返すことと記録を蓄積することが、私たちの関わり合いのルールになっていったのである。

さらに、起業家の省察がテーマになって以降、私たちの関わり合いが互いの省察を促すものであることが明確になっていった。起業家は対話において、自らの起業家活動を遂行する中での決定的な事象について話をする中で、他方、研究者は起業家の語りを聞き、カードを作成する中で、起業家と研究者の双方が省察を継続的に行なうことになった。また、対話の逐語記録が起業家にフィードバックされるため、起業家は自らの省察プロセスを対象にした省察ができる仕組みになった。研究者は起業家の試行錯誤のプロセスを継続的に観察し、記述する機会を得ることになる。

以上のように、起業家と研究者という関心・利害が異なる者同士であっても、媒介させる道具の使い方によっては、共働性を確保できる可能性が見出される。

2 共働的な道具としての経営学

本稿では、共働的な道具を媒介に展開される研究者（調査者）と起業家（調査対象者）の情動的な応答を事例として記述してきた。こうした記述は、ラボール概念のもとで中立性・客観性を志向する事例記述とは、かなり異なるものになったであろう。しかし、調査者と調査対象者が積極的に関わり合うことは、経営学においては実は珍しいものではない。例えば、人間関係論に端を発する組織行動論は、常に経営実践への積極的な介入を念頭に、その理論を構築してきた（貴島ほか、2017）。イリイチが言うように、共働的な道具という時の「道具」にはハードウェアのみならずカード法のような知識創造システム（梅棹、1969）が含まれるならば、経営学という知識創造システムそれ自体を共働的な道具として捉え直すこともできるだろう。

例えば、その研究者としての生涯を通して、経営実践への介入のための理論や方法論を考え抜いた経営学者として、アージリス（C. Argyris）の名が挙げられる。アージリスには、比較的よく知られた概念——信奉理論と使用理論、防衛的ルーティンと建設的ルーティン、組織Ⅰ／組織Ⅱの学習システムなど——があるが、こうした概念の基盤となる彼の科学思想については、さほど知られていない。だが、彼が提唱したアクション・サイエンス（Argyris *et al.*, 1985）こそが、今や専門家の独占物となった科学を、経営実践に携わる誰しもの手に差し戻し、彼ら／彼女ら自身が抱える問題の解決のために使用できる共働的な道具へと作り変えようとするものだったのである（福本ほか、2014；貴島ほか、2017）。

筆者らが主張したいのも、実務家との共働的な関わり合いを作り出すための道具として、フィールドの中においてこそ経営学を用いることができるということである。繰り返し述べているように、起業家の試行錯誤をリアルタイムで追跡するようなフィールドワークには様々な困難が伴う。だからこそ、アージリスが試みたように、研究者と実務家の双方に創造的な刺激をもたらす共働的な道具としての経営学を開発する必要があるだろうし、フィールドワークの最中においてこそ、私たち研究者は単にデータを収集する「調査者」であるだけでなく、よりよい経営実践の実現に貢献する「経営学者」でいなければならない。経営学を媒介に、実務家と研究者が様々な実践的・学術的挑戦を行なう。イリイチであれば、このような共同体のことを「共働的な社会」と呼ぶだろう。

VI 結び——今後の課題

本稿は、起業家の試行錯誤をリアルタイムで追跡するために、研究者は起業家といかなる関係を構築すべきか、また、どのように関係を築くべきかについて、探索的な考察を行ってきた。研究者と起業家が感情的に応答し合う二人称的な関係を構築すること、そのために共働的な道具を意識的に配置することが、現時点での暫定的な回答である。

残された課題は多い。本稿の事例記述は二人称的アプローチを起業家研究の方法に応用した端緒であり、今後、観察や記述の精度をいかに向上させるか、研究成果をいかなる基準で評価するか、

同様のアプローチを他の研究主題にも応用できるかどうか、などについてのさらなる検討が必要であろう。特に、経営学における二人称的アプローチがいかなる意味での科学でありうるかについての検討は、喫緊の課題である。また、共働的な道具の使用に関しても、本稿は筆者らの取り組みを簡単に振り返っただけにとどまっており、その使用方法や効果についてのより徹底した考察が求められる。いずれにしても、起業家研究の方法論としての二人称的アプローチおよび共働性には、さらなる展開が見込めるだろう。以上が本稿の結びである。

謝辞 本研究ノートの投稿にあたり、担当編集委員の江島由裕氏と匿名レフェリーの方々から建設的なコメントを頂戴した。また、本稿の内容を発表した企業家研究フォーラム 2018 年度春季研究会と第 9 回「アントレプレナーシップ・コンファランス」では、司会や討論者を担当してくださった兒玉公一郎氏、福嶋路氏、江島由裕氏など、多くの方々から示唆に富むコメントを頂戴した。草稿に対しては、樋口あゆみ氏から懇切丁寧なコメントを頂戴した。ここに記して、感謝の意を表したい。

本稿は、科研費 18K12865、19K13773 の助成と野村マネジメント・スクールの研究助成（2019 年度）を受けて進められた研究成果の一部である。

注

- 1) 「ラポール」という言葉の出自はそもそも心理学にあり、元より、セラピストとクライアントの間の関係を規定する方法論的な概念である。
- 2) また、石岡丈昇は、事後的に見れば「非合理的」とも思える思考や行為（の矛盾）も、現在進行形の実践の中では、時間的・認知的な制約のもとでの「合理性」を持ってなされたものであるとする（岸ほか、2016）。そして、こうした「実践の時間」の中での当事者の「合理性」をリアルタイムで捉えていくことにこそ、フィールドワークという調査方法の独自性があるとする。
- 3) この点については、レディ自身も言及している Ryle (1949) や、エスノメソドロジーの立場から心の社会学的記述を試みた Coulter (1979) を参照されたい。
- 4) 木下記念事業団はマルイトグループ創業者の木下政雄氏の個人資産で設立された。
- 5) 2012 年 3 月 16 日に実施した第 10 回目の対話から、IC レコーダーを使用し始めた。対話を開始した当初、IC レコーダーを使用しなかった理由は、対話が操作的な道具になることを避けるためであったと事後的に解釈できる。
- 6) 乃村さんのメール（2011 年 4 月 21 日）。
- 7) カードが共働的な道具になると判断したと事後的に解釈できる。
- 8) 伊藤のメール（2011 年 7 月 7 日）。
- 9) 金井先生は、神戸大学大学院経営学研究科の教授（当時）で、私の大学院での指導教員である。
- 10) 天龍寺壽寧院住職の小川湫生氏へのインタビュー（2012 年 2 月 5 日）。
- 11) 見られる自己（me）については、Reddy (2008, Ch. 7) を参照。
- 12) 乃村さんのメール（2011 年 4 月 13 日）。
- 13) 伊藤のメール（2011 年 4 月 13 日）。
- 14) 既存の手法を適用することで、対話が操作的な道具になることを避けるためであったと事後的

に解釈できる。

- 15) 伊藤のメール (2011年4月24日)。
- 16) 23時頃、前回の対話の逐語記録を伊藤はメールしており、その返信だった。
- 17) 株式会社 SMART INTEGRATION は、乃村さんが2012年9月26日に設立したスタートアップ企業である。
- 18) 乃村さんのメール (2013年10月10日)。
- 19) 乃村さんのメール (2014年3月1日)。
- 20) 伊藤のメール (2014年4月19日)。
- 21) 乃村さんのメール (2014年4月19日)。

参考文献

- 伊藤智明 (2010) 「プロジェクトと文脈の関係性—映像コンテンツ製作の事例分析—」『イノベーション・マネジメント』第7号, 91-106頁。
- 梅棹忠夫 (1969) 『知的生産の技術』岩波書店。
- 小倉昌男 (1999) 『小倉昌男 経営学』日経BP社。
- 岸政彦・石岡文昇・丸山里美 (2016) 『質的社会調査の方法—他者の合理性の理解社会学』有斐閣。
- 貴島耕平・福本俊樹・松嶋登 (2017) 「組織行動論の本流を見極める：人間関係論、組織開発、アクション・サイエンス」『国民経済雑誌』第216巻第2号, 31-55頁。
- 佐伯胖 (2014) 「そもそも「学ぶ」とはどういうことか—正統的周辺参加論の前と後—」『組織科学』第48巻第2号, 38-49頁。
- 高橋勅徳・松嶋登 (2009) 「企業家語りに潜むビッグ・ストーリー—方法としてのナラティブ・アプローチ—」『国民経済雑誌』第200巻第3号, 47-69頁。
- 福本俊樹・松嶋登・古賀広志 (2014) 「実証主義の科学的有用性—介入を目指す新たな科学思想としてのアクション・サイエンス—」『日本情報経営学会誌』第34巻第4号, 59-70頁。
- 古瀬幸広・廣瀬克哉 (1996) 『インターネットが変える世界』岩波書店。
- 丸山里美 (2006) 「野宿者の抵抗と主体性—女性野宿者の日常的実践から—」『社会学評論』第56巻第4号, 898-914頁。
- 山田富秋 (2000) 「フィールドワークのポリティクス」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房, 所収。
- 山田富秋 (2011) 『フィールドワークのアポリアーエスノメソドロジーとライフストーリー—』せりか書房。
- やまだようこ (2000) 「喪失と生成のライフストーリー—F1ヒーローの死とファンの人生—」やまだようこ編著『人生を物語る—生成のライフストーリー—』ミネルヴァ書房, 所収。
- やまだようこ (2007) 『喪失の語り—生成のライフストーリー—』新曜社。
- Argyris, C., R. Putnam, and D. M. Smith (1985) *Action Science: Concepts, Methods, and Skills for Research and Intervention*, San Francisco: Jossey-Bass.
- Blumer, H. (1969) *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (後藤将之訳『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法—』勁草書房, 1991年。)
- Burrell, G. and G. Morgan (1979) *Sociological Paradigms and Organizational Analysis*, London:

- Heinemann. (鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳『組織理論のパラダイム—機能主義的分析枠組み—』千倉書房, 1986年。)
- Cope, J. and G. Watts (2000) “Learning by doing: an exploration of experience, critical incidents and reflection in entrepreneurial learning”, *International Journal of Entrepreneurial Behaviour & Research*, 6, 104-124.
- Coulter, J. (1979) *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan. (西阪仰訳『心の社会的構成—ヴィトゲンシュタイン派エスノメソロジーの視点—』新曜社, 1998年。)
- Flick, U. (2007) *Qualitative Sozialforschung*, Rowohit Verlag. (小田博志監訳『新版 質的研究入門—人間の科学—のための方法論—』春秋社, 2011年。)
- Gartner, W. B. (2007) “Entrepreneurial narrative and a science of the imagination”, *Journal of Business Venturing*, 22, 613-627.
- Holstein, J. A. and J. F. Gubrium (1995) *The Active Interview*, Thousand Oaks and London: Sage Publications. (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査—』せりか書房, 2004年。)
- Illich, I. (1973) *Tools for Conviviality*. New York: Harper & Row. (渡辺京二・渡辺梨佐訳『コンヴィヴィアリティのための道具』筑摩書房, 2015年。)
- Langness, L. L. and G. Frank (1981) *Lives: An Anthropological Approach to Biography*, Novato: Chandler & Sharp Publishers. (米山俊直・小林多寿子訳『ライフヒストリー研究入門—伝記への人類学的アプローチ—』ミネルヴァ書房, 1993年。)
- Lincoln, Y. S. and E. G. Guba (1985) *Naturalistic Inquiry*, Newbury Park and London: Sage Publications.
- Mead, G. H. (1934) *Mind, Self and Society*, Chicago: University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973年。)
- Reddy, V. (2008) *How Infants Know Minds*, Cambridge and London: Harvard University Press. (佐伯胖訳『驚くべき乳幼児の心の世界—「二人称的アプローチ」から見えてくること—』ミネルヴァ書房, 2015年。)
- Ryle, G. (1946) *The Concept of Mind*, London: Hutchinson. (坂本百大・宮下治子・服部裕幸訳『心の概念』みすず書房, 1987年。)

投稿日：2020年6月30日

掲載決定日：2021年1月15日

**Engagement with an Entrepreneur and a Researcher
Second-person Approach and Convivial Tools as Methods of Entrepreneurial Research**

Chiaki Ito and Toshiki Fukumoto

The purpose of this paper is to explore qualitative methodology that enhances the viability and continuity of fieldwork that tracks entrepreneurs' trial and error. Capturing the trials and errors of entrepreneurs requires second-person engagement with entrepreneurs and convivial tools. In this article, through examples of the author's own fieldwork with an entrepreneur and a researcher, we suggest that the knowledge creation system of management science can be used as convivial tools for forming and maintaining relationships.
